

# アリア「おお、娘よ、お前と別れる今」 K.513 —— ゴットフリート・フォン・ジャカンとの交友 ——

野口秀夫

## 1. はじめに

鳥代：ヴィーン時代のモーツァルトがゴットフリート・フォン・ジャカン Gottfried von Jacquin (1767–92) と家族ぐるみの交流を持ったことはご存知の通りですが、彼がアマチュアの並外れたバス歌手であり、また作曲も嗜んだことは忘れてはならないことです<sup>注1</sup>。

犬輔：アリア「おお、娘よ、お前と別れる今 Mentre ti lascio, oh figlia」 K.513 はモーツァルトの全自作品目録に「[1787年3月] 23日 / ゴットフリート・フォン・ジャカン氏のためのアリア den 23<sup>ten</sup> [März 1787] / Eine Arie für H: Gottfried von Jacquin / begleitung. 2 violini, 2 viole, 1 flauto, 2 clarinetti, 2 fagotti, 2 Conti e Basso.」<sup>注2</sup>と書かれているのでゴットフリートが歌うためのバスアリアとして書かれたことは確かです。

教授：ではこのアリアの歌詞がどこから採られたのか、またどのような機会にこのアリアが歌われたのか、そして曲には手本とするものがあつたのかなどについて調査したまえ。

## 2. アリア「おお、娘よ、お前と別れる今」 K.513 の歌詞の出典

鳥代：歌詞を調査してみて分かったことですが、「私はあなたを残します ti lascio」で始まる詩はずいぶんたくさんあるものなのです<sup>注3</sup>。その中でジョヴァンニ・パイジエッロ Giovanni Paisiello (1740–1816) の《ダリオの敗北 La disfatta di Dario》(1776 ローマ)<sup>注4</sup>、あるいはトマーズ・トラエッタ Tommaso Traetta (1727–79) が作曲した《ダリオの敗北》(1778 ヴェネツィア)<sup>注5</sup>の第二幕第9場に K.513 と同じ歌詞がありました。

犬輔：典型的な別れの場面ですね。マケドニア王アレクサンドロ（アレクサンダー）との決戦で、ペルシャ王ダリオ（ダリウス）は敵に敗れ武装を解除されました。そこで彼は、父親への愛とアレクサンドロへの愛の間で揺れ動く娘のスタティラと出会います。ダリオはアレクサンドロに屈する用意ができていないため、自分の人生が終わりに近づいていることをすでに受け入れています。彼は娘との悲しい別れを選択しました。

鳥代：ではパイジエッロの《ダリオの敗北》(1776 ローマ) から第二幕第9場を訳しておきましょう。王同士の戦いから始まります。なおネアルコはアレクサンドロの軍司令官です。

表 1 パイジエッロ《ダリオの敗北》から第二幕第9場

ATTO II. SCENA IX. <i>Escono combattendo Dario, ed allessandro indi Statira, e Nearco.</i>	第二幕 第9場 ダリオとアレクサンドロが戦いながら登場、 その後スタティラ、そしてネアルコ。
Dar. Invano Tiranno, invano Fuggirai l'ire mie. Aless. Superbo, e ancora ardisci D'insultarmi così? Ferma, o ti sveno, Ed a me cedi quel ferro. Dar. Ah pria... la morte... Aless. Sconoscente l'avrai. (Cade Dario, ed Alessandro lo disarmo.)	<b>ダリオ</b> 無駄だ、暴君よ、私の怒りから逃れようとしても無駄だ。 <b>アレクサンドロ</b> たいしたものだ、それでもお前はそうに私を侮辱する勇気があるのか？ やめよ、さもなくば切り裂くぞ、その武器を渡せ。 <b>ダリオ</b> ああ… 死の前に… <b>アレクサンドロ</b> その望みが叶うかは知らぬ。 (ダリオは倒れ、アレクサンドロは彼の武装を解く。)
Dar. Inique Stelle! Il ferro m'abbandona! Aless. E'ancor non cedi? Al Vincitor, superbo, Chiedi la vita in dono. Dar. Cedo al dest: ma vinto ancor non sono. Aless. (Oh Numi! E'questo il prigionier.) Chi sei? Guerrier, dimmi, poc'anzi, Non ti strinsero i lacci. Al cenno mio... Dar. Sì, fui tuo prigionier, Dario son'io.	<b>ダリオ</b> 不公平な運命よ！ 武器が私を見捨てる！ <b>アレクサンドロ</b> まだ屈服しないのか？ 誇り高き勝者に 命乞いをしないのか。 <b>ダリオ</b> 私は東に退却する。まだ負けてはおらぬ。 <b>アレクサンドロ</b> (ああ、神様！ こいつは捕虜では) お前は誰だ？ 戦士よ、答えよ、今すぐに、 縄を締めるつもりはない。私のうなずきひとつで… <b>ダリオ</b> そのとおり、私は捕虜であったダリオだ。

<p>Near. Numi, che ascolto mai! Dar. Venni... Volea... Sedussi i tuoi Custodi. Aless. Barbaro, e che tentasti? Dar. Infidie e frodi. Aless. E gual ragion ti mosse à tanto eccesso. Dar. Contro un usurpator tutto è permesso. Aless. Traditore! (<i>a Dario</i>) Nearco; olà miei Fidi Custodite costui. Serbatelo al mio sdegno. Dar. Il tuo furor del mio trionso è segno. Near. Che fatal colpo è questo! Stat. Alessandro mio ben, lode agli Dei Salvo alfin ti riveggo, a pien di gloria. Dar. Mancava un'altro fasto alla vittoria. Stat. Numi! Che veggo! Il Padre In ceppi! Ah Padre amato! Oh Dio! Non posso... Signor, pietà, diviso in tanti affanni Nò non regge il mio cor. Dar. Figlia crudele! Ecco il dono, ecco il frutto Del tuo malnato amor. Fuggi spietata Involati al mio sguardo. Stat. Ah Padre, io manco Agli atroci tuoi detti, Ah dona, caro (<i>ad alessandro</i>). A questo amaro pianto il Padre mio. Aless. Più resister non sò. Statira addio.</p> <p style="text-align: right;"><i>parte.</i></p> <p>Stat. Aspetta ancor per poco; oh Dio! Non m'ode, Partì. Padre... Signor... S'io fui... Nearco Salvami il Padre mio, Quante sciagure Adunate Empi Dei Per lacerarmi il cor. Dar. Figlia, t'accheta. Non accrescer tormenti All'affanno d'un Padre. Alfin la Morte. Non è il male peggior. Vissi sinora Abbastanza alla Gloria. Near. E' tempo omai Signor... (<i>Dario non lo ascolta.</i>) Dar. Oh Dio! Tu piangi? (<i>a Stat.</i>) A quell'imbelle duolo Figlia amata nascondi. Near. Che duro ufficio è il mio!</p>	<p>ネアルコ 神様、私は今何を聞いたのか！ ダリオ 私は行き… 要求し… お前の近衛兵を騙した。 アレッサンドロ 野蛮な、何をしようとした？ ダリオ 裏切りと欺瞞。 アレッサンドロ そしてその理由により過剰な行動をとったと。 ダリオ 篡奪者に対してはあらゆることが許される。 アレッサンドロ 裏切り者！（<i>ダリオに</i>）ネアルコ、 さあ、忠臣たち、 この男を護衛せよ。 私の軽蔑から守ってやれ。 ダリオ お前の激怒は私の勝利の兆候だ。 ネアルコ これはなんと致命的な打撃だろう！ スタティラ いとしいアレッサンドロ、神々を讃えましょう。 やっと無事に、栄光に満ちたあなたに会えました。 ダリオ この勝利にはもう一つの輝きが欠けていた。 スタティラ 神様！ 私は何を見ているの！ 父上 足枷に繋がれて！ ああ、愛する父よ！ ああ神様！ 信じられない… あなた、お憐れみを、多くの心配で分裂しています いいえ、心が耐えられません。 ダリオ 残酷な娘よ！ これが贈り物、これがお前の 不運な愛の果実だ。容赦なく逃げて、 私の視線から飛び去ってくれ。 スタティラ ああ、父上、あなたのひどいお言葉が私には 理解できません。ああ、教えてください、 いとしい人（<i>アレッサンドロに</i>）。 父はこの悲痛な叫びで嘆いています。 アレッサンドロ もはや私には耐えられぬ。スタティラ、さらば。</p> <p style="text-align: right;"><i>退場</i></p> <p>スタティラ お待ちください。ああ神様！ 彼は私の言うことを聞かずに 立ち去った。父上… お父様… もし私のことで… ネアルコ、父を助けてください、どれほど多くの 不幸が邪悪な神々を集めて 私の心を引き裂くことでしょう。 ダリオ 娘よ、お願いだ。 父親の不安をさらに 苦痛にさらさないでくれ。結局死ぬのだ。 それは最悪のことではない。 私はこれまで栄光のために十分に長く生きてきた。 ネアルコ もうその時が来ました…（<i>ダリオは耳を貸さない。</i>） ダリオ ああ神様！ お前は泣いているのか？（<i>スタティラに。</i>） その卑劣な痛みから 逃れてくれ、愛する娘よ。 ネアルコ 私の役目はなんと厳しいことか！</p>
--	---

<p>Dar. Ne mi rispondi? (<i>a Stat.</i> Dove, hai, dove son'io, misero Padre Agli effremi congedi Chì resister potrà. Queste ch'io sento Mormorarmi d' intorno aure funeste, Aure sono di morte! Ah che fia mai Di me, de' Pegni miei, di Te cor mio (<i>a Stat.</i> Che fra gli affetti miei Sei l'affetto primiero. Inumano Alessandro è questo un pegno Della Clemenza tua? Barbaro! io chiamo Tutti i Numi a vendetta. Amico in questo Sventurato moment Alla tua cura affido I miei teneri pegni, e l'onor mio. Patria, Figli, Consorte, io parto; Addio. Mentre ti lascio o Figlia In sen mi trema il core. Ahi, che partenza amara! Provo nel mio dolore Le smanie, ed il terror. Parto tu piangi? Oh Dio (<i>a Stat.</i> Ti chieggo un sol momento. (<i>a Near.</i> Resta (<i>a Stat.</i>) che fier tormento? Ah mi si spezza il cor.  (<i>parte con Near.</i> Stat. Misera! E vivo ancora? Il Padre estinto... Sarai contenta, iniqua sorte, hai vinto.  <i>parte.</i></p>	<p>ダリオ 答えてくれるか? (スタティラに。 どこに偽り別れに抵抗できる哀れな父がいるかを、 どこにお前が私を 見つけることができるのかを。私の周りでささやき 聞こえるこの風は 死の風だ! ああ、私は、私の誓いは、私の最も大切な 愛情であるお前への私の心は (スタティラに。 どうなるのだろうか。 非道のアレクサンドロ、 これは慈悲の誓約なのか? 野蛮人! 私はすべての 神々に復讐を呼び掛ける。友よ、この 不幸な瞬間に、 私の優しい誓いと私の名誉を あなたの配慮に委ねよう。 祖国、子供たち、妻よ、私は去る。さらば。 お前と別れるとき、ああ娘よ、 私の心は胸中で震えている。 ああ、なんと苦い別れだろう! 私は痛みの中に感じている 不安と恐怖を。 私は行く。泣くのか? ああ神様! (スタティラに) 少しだけ猶予願います。(ネアルコに) 残りなさい (スタティラに) なんと激しい苦痛! ああ、私の心は張り裂ける。  (<i>ネアルコと退場</i>)  スタティラ 惨めだわ! 私はまだ生きている? 失われた父上... 不公平な運命、あなたは勝った。幸せになるでしょう。  <i>退場</i></p>
---	---

犬輔：歌詞の作者は誰なんだろう。

鳥代：このオペラの原典はサントアンジェロ公カルロ・ディオダート・モルビッリ Carlo Diodato Morbilli duca di Sant'Angelo の台本によるパスクワーレ・カファール Pasquale Cafaro (1715-87) 作曲《ダリオの敗北》(1756 ナポリ) <sup>注6</sup>です。

教授：だが、その原作に該当歌詞はない。詳細をルーチョ・トゥファアーノ Lucio Tufano (1970- ) が論文に書いているので参照するように <sup>注7</sup>。

犬輔：はい。トゥファアーノは出どころがパイジエッロ版だとした上で、歌詞作者についてリブレットから但し書きを引用しています。「音楽はナポリの宮廷マエストロ、ジョヴァンニ・パイジエロによるものです。ドラマ内で変更されたことはすべて、劇場の現在の状況に適應するために行われなければなりません。彼はまた、最初の作者によって詩作された (composte) 他の作品に散りばめられたのと同じ感情を確実に利用するようにしました」。ここから歌詞の“変更者”が“最初の作者”と同じである可能性が排除されるといいます。

鳥代：次にトゥファアーノはアレキサンドリア上演版 (1779) <sup>注8</sup>の但し書きを引用するのです。「このドラマは、何年も前にナポリのモルベッリ公爵によって別の形式で作曲され、その後ローマの修道院長ジュゼッペ・カザーリによって演劇用に縮小されたものですが、現状では、音楽の利便性とこの劇場の状況に合わせて、さらに顕著に変化しています」。ここからはローマの修道院長ジュゼッペ・カザーリが改訂者の一人であるとしても、アレキサンドリア上演版に該当歌詞がないことから我々の求めている歌詞の作者であるかどうかは曖昧のままだという結論を導きます。

教授：さらにトゥファアーノはフェリーチェ・アレクサンドリ Felice Alessandri 作曲《エピロ王メドンテ Medonte re di Epiro》(1775 ミラーノ) <sup>注9</sup>から第二幕第9場のアリアを紹介している。

表2 アレクサンドリ《エピロ王メドンテ》(1775 ミラーノ) 第二幕第9場のアリア

<p>Cara, deh prendi in pace L'estremo addio funesto; l'ultimo pegno è questo del mio costante amor. Vado... Tu piangi?... Amico, (<i>ad Evandro</i>) lasciami un sol momento... Mio ben... resta... oh tormento! Ah mi si spezza il cor!</p>	<p>いとしい人、免れがたい最後の別れを 安らかに受け入れてください。 最後の誓いは、 私の変わらぬ愛です。 私は行く... 泣くのか?... 友よ、(エヴァンドロに) 少しだけ待ってください... いとしい人... 残りなさい... ああ、苦痛だ! ああ、私の心は張り裂ける!</p>
--	---

犬輔：あっ、第2節がそっくりです。ここから採ってきたのかも知れません。

教授：この《エピロス王メドンテ》(1775 ミラーノ) でメドンテの役を演じたテノールのジョヴァンニ・アンサーニ Giovanni Ansani (1744-1826) はパイジエッロの《ダリオの敗北》でのダリオ役であった。トゥファアーノは「したがって、テノール歌手が、ミラーノの舞台上で間接的ではあるが[アリアは別歌手が歌ったものゆえ]、有効性が検証された劇的な文脈と詩的なテキストを部分的にローマで再利用するように提案した可能性がある」と述べている。

鳥代：そのリブレットを調べてみました。テキストはミラーノの地域公爵領劇場付き詩人[ジョヴァンニ・]デ・ガメツラ氏によるとあります(図1)<sup>注10</sup>。したがってデ・ガメツラが K.513 の歌詞の第2節の間接的な作者であるとは言えるかもしれませんが、全詩行の作者であるとは言えません。

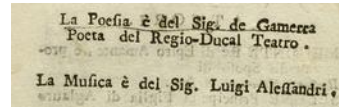


図1《エピロス王メドンテ》  
(1775 ミラーノ) リブレットから

犬輔：ところでパイジエッロ版が上演されたローマのアルジェンティーナ劇場付き詩人は1776年当時誰だったんだろう。改訂者候補の筆頭に挙げるべき人だと思いますよ。

教授：劇場付き詩人は分からない。その代わり、ローマの出版者アルカンジェロ・カサレッティ Arcangelo Casaletti (1729-1799?) が編集者としても活躍していたという情報がある<sup>注11</sup>。彼はパイジエッロ版の挨拶文に署名をしている(図2)。

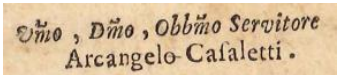


図2《ダリオの敗北》  
(1776 ローマ) リブレットから

犬輔：その人が一番怪しいですね。先ほど引用があったパイジエッロ版の但し書きは「音楽はナポリの宮廷マエストロ、ジョヴァンニ・パイジエロによるものです。[私カサレッティによって] ドラマ内で変更されたことはすべて、劇場の現在の状況に適応するために行われなければなりません。彼[パイジエッロ]はまた、最初の作者[カファエロ]によって作曲された (composte) 他の作品[複数]に散りばめられたのと同じ感情を確実に利用するようにしました」と読めるのではないのでしょうか。

教授：まとめると、デ・ガメツラ作の歌詞をアンサーニがカサレッティに伝え、カサレッティが第二幕第9場を新しくするに当たってその第2節(表2)を流用したと言いたいのだね。

鳥代：ところで、流用後の第2節(表1)には対面する相手を変えるト書きが三回出てくるため、これをコンサートアリアとして歌うと誰に言っているのかあやふやになりかねません<sup>注12</sup>。しかもレアルコはコンサートアリアには登場しない人物ですから「少しだけ猶予願います」の向け先を変える必要があります。

犬輔：向け先は神様がスタティラですね。後者であれば「お前にはほんの一時を私は求めるのだ」と訳すことになるでしょう<sup>注13</sup>。モーツァルトはどう対応しているのですか。

鳥代：とりあえずテキストを変更しています。つまり娘に向かっての「残りなさい Resta」を「ああ、神様 Oh Dio」に変更しています。でもこれだけでは「少しだけ猶予願います」を神に向かっての願いと解釈するには不十分です。さらに曲の構成で対応していると思われます。

教授：では、テキストの調査はひとまずこのくらいにして、音楽の調査に移ろう。

### 3. アリア「おお、娘よ、お前と別れる今」K.513 はどのように歌われたか

鳥代：自筆譜はベルリン州立図書館-プロシャ文化財、メンデルスゾーン・アルヒーフ音楽部門所収です(図3)<sup>注14</sup>。一目見て気が付くのは楽器編成の多さです。譜表の上から順に Fl, Vn1, Vn2, Va1&2, Cl1, Cl2, Fg1, Fg2, Hr1&2, Basso, Vc e Basso となっており、いつもの順序とは異なっている上に、フルートは空いていた最上段に追加されているのです<sup>注15</sup>。『全自作品目録』の編成表記にフルートは含まれていましたので、14声部の曲が唯一の完成版と見ていいでしょう。

犬輔：アマチュアのゴットフリートが自分で歌うために主催した演奏会とするとこのような大編成は考えにくいですけど…。

教授：別目的で計画された演奏会に彼が複数歌手のうちの一人として参加したということが考えられる。モーツァルトはその演奏会に準備されたオーケストラの規模を最大限に活用した曲を書いて友人のアマチュア歌手を盛り立てたのだろう。

鳥代：バス声部の難易度に関してシュテファン・クンツェは新全集の序文で次のように述べています<sup>注16</sup>。「このアリアの声に求められる要求は、ルートヴィヒ・フィッシャーのために書かれた K.512 に比べてはるかに少ない。ジャカンの歌唱能力に合わせて、音域も大幅に制限されている。基本的に B まで下がり (A には1回だけタッチする)、es'までしか上がらない(対照的に K.512 の範囲は E から e' までである)」。



図3 K.513 自筆譜楽器編成



犬輔：81小節からの第6詩行「私は行く。泣くのか？ ああ神様！」が第2節でありながらラルゲットの部分にあることを不思議に思ったのですが、曲を聴いてその理由が分かりました。ここは実質レチタティーヴォ・アコンパニャートなのですね。心情を歌う筈のアリアが、ここではアクションを説明しているからです。

教授：懸案である第7詩行はどう解決されているかね。

犬輔：ラルゲットの最後の言葉が「神様！」（初出）で、続くアレグロの冒頭に第7詩行「少しだけ猶予願います」が来ますから、まぎれもなく神様へのお願いであることがはっきりと分かるようになっています。115小節で第7詩行が繰り返される部分では第8詩行を先行させ、そこにも「神様！」（2回目）という言葉が入っています。鳥代さんが指摘したとおり、語句の置き換えと曲の構成の仕方の方方によって解決していることが分かりました。

鳥代：ラルゲットは娘に向かって、アレグロは神様と娘に向かって、そしてピュ・アレグロは自分に向かって心情を吐露しているのですね。

教授：ここでパイジエッロのアリアについて述べたトゥファアーノの見解を長文になるが引用しておこう。モーツァルトの曲と比較しながら読んでもらいたい。「ターラント出身の作曲家 [=パイジエッロ] は、彼のイントネーションにおいて第1節の遅いテンポ（2/4 ラルゲット）と最後の3行の速いテンポ（C アレグロ）の間に明確なコントラストを確立している。第2節の最初の行はレチタティーヴォ・アコンパニャートの形で配置され、二つの主要セクション間の短い接続要素（5小節）として機能する。変ホ長調の典型的な哀愁を帯びた調で書かれたこの曲は、比較的短い楽器序奏（12小節）を特徴としている。[中略]アリアの最初の部分を構成するラルゲットで、パイジエッロは第5詩行の“不安 smanie”に特に重点を置き、挑戦的なメリスマの華やかさを引き起こしている。さらに、ボーカルラインの大きなジャンプは注目に値する。これは、ダリオが娘から離れる瞬間に感じる内部裂傷の明白な兆候だ。緩徐部分はシステムのドミナントキーである変ロ長調で終わる。この時点で、パイジエッロは第6詩行に沿ってレチタティーヴォ・アコンパニャートの短い括弧を開く。この括弧には、動きへの衝動とスタティラの叫びによって引き起こされる感情が含まれている。これは非常に独創的な選択であり、詩の概要に関する特定の“処方箋”から来たものではない。[中略]いくつかの小節の繋がりは、アレグロの爆発をさらに印象的にする。アレグロは第7詩行でネアルコに宛てた遅延の要求で始まる。その直後、パイジエッロは第2節の残りを続けるのではなく、第1～2詩行を取り上げ、遅いセクションの始まりで聞こえたメロディを、新しい高速で進む韻律に適応させる。また、第3詩行を繰り返す（ただし、前半の周囲の詩とは異なる素材で）、テキストのさまざまな領域からの詩の断片を混ぜ合わせて続ける。まるで登場人物の悩める魂の中に君臨する混乱を描写しているかのようだ。第9詩行はかなり高度な位置で問題となっており、特徴的なマドリガリズムを生み出している。実際、傷心のイメージは、言葉の間隔を空けるだけでなく、言葉を分断するポーズの反復使用により、ばらばらで不連続なメロディ曲線に変換される」。

犬輔：モーツァルトの曲と同じような特徴を持ってもいるんですね。例の第7詩行はパイジエッロのオペラではネアルコに対して、モーツァルトのコンサートアリアでは神に対してですが、両者とも最も大事な詩行としてアレグロの開始に置いているのは意外な一致です。

教授：トゥファアーノは第7詩行のイントネーションも両者は似通っているという。譜例1と譜例2だ。



譜例1 パイジエッロ《ダリオの敗北》からアリア「おお、娘よ、お前と別れる今」アレグロ開始部（第7詩行）



譜例2 モーツァルトのアリア「おお、娘よ、お前と別れる今」K.513アレグロ開始部（第7詩行）

鳥代：似ているかどうかは微妙なところですね。

教授：トゥファアーノは「これまでに挙げた要素を単独で取り上げた場合、派生の確実な証拠とはみなされない。しかし、これらが同時に存在することは、偶然ではなく、この二つの作品の間に密接なつながりが存在することを示しているように私には思える」と述べている。

犬輔：最終確認の意味でパイジエッロのアリアを楽曲分析しておきましょう。楽譜はトゥファアーノの論文に載っています。



## 5. パイジエッロ《ダリオの敗北》からアリア「おお、娘よ、お前と別れる今」の楽曲構成

鳥代：わたしが分析するわね。楽器編成は Fl tr.1, Fl tr.2, Hr1&2, Vn1, Vn2, Va, Bs, テノールです (tr.はトラヴェルソのことと思われます)。構成を表4に示します。凡例は犬輔さんの表3に倣います。なお、楽譜にはありませんがリブレットのト書きも記入しておきます。

表4 パイジエッロ《ダリオの敗北》からアリア「おお、娘よ、お前と別れる今」の構成

小節	詩行	調性	形式
13-34	1-2 Mentre ti lascio, o figlia, o figlia, in sen mi trema, mi trema il core, in sen mi trema il core; mentre ti lascio, o figlia, in sen mi trema il core, il core in sen mi trema. お前と別れるとき、ああ娘よ、ああ娘よ、胸中で震えている、心は震えている、私の心は胸中で震えている；お前と別れるとき、ああ娘よ、私の心は胸中で震えている、私の心は胸中で震えている。	Es→B	Larghetto 2/4
35-46	3-4-5 Ahi che partenza amara, ahi che partenza amara! Provo nel mio dolore, provo nel mio dolore le smanie ed il terror. ああ、なんと苦い別れだろう、ああ、なんと苦い別れだろう！私は痛みの中に感じている、私は痛みの中に感じている、不安と恐怖を。	B	
47-59	1-4-5 Mentre ti lascio, o figlia, provo nel mio dolore le smanie ed il terror, le smanie ed il terror, le smanie ed il terror. お前と別れるとき、ああ娘よ、私は痛みの中に不安と恐怖を感じている、不安と恐怖を、不安を、不安と恐怖を。	B	
60-64	6 Parto. Tu piangi? Oh dio! Tu piangi? Oh dio! (a Stat. 私は行く。泣くのか？ ああ神様！泣くのか？ ああ神様！（スタディラに）	B	Recitativo C
65-71	7 Ti chieggo un sol momento, ti chieggo un sol momento, un sol momento. (a Near. 少しだけ猶予願います、少しだけ猶予願います、少しだけ。（ネアルコに）	Es→B	Allegro
73-82	1-2 Mentre ti lascio, o figlia, o figlia, in sen mi trema il core. お前と別れるとき、ああ娘よ、ああ娘よ、私の心は胸中で震えている。	Es	
83-86	3 Ahi che partenza amara, ahi che partenza amara! ああ、なんと苦い別れだろう！ ああ、なんと苦い別れだろう！	Es	
87-89	8 Figlia! Resta! (a Stat.) Oh dio! 娘よ！ 残りなさい！（スタディラに） ああ、神様！	Es→B	
90	6 Tu piangi? (a Stat.) 泣くのか？（スタディラに）	B	
91-94	8 Che fier tormento! Che fier tormento! なんと激しい苦痛！ なんと激しい苦痛！	B	
97-100	7 Ti chieggo un sol momento, ti chieggo un sol momento, un sol momento. (a Near. 少しだけ猶予願います、少しだけ猶予願います、少しだけ。（ネアルコに）	Es	
101-102	8 Oh dio! Che fier tormento! 神様！ なんと激しい苦痛！	Es	
103-106	9 Ah mi si spezza il cor, ah mi si spezza il cor. ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける。	Es	
107-108	1 Figlia, ti lascio! 娘よ、お前と別れる！	Es	
109-110	3 Ahi che partenza amara! ああ、なんと苦い別れだろう！	Es	
111-112	8 Oh dio che fier tormento! 神様、なんと激しい苦痛！	Es	
113-118	9 Ah mi si spezza il cor, ah mi si spezza il cor. ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける。	B→Es	
119-120	1 Figlia, ti lascio! 娘よ、お前と別れる！	Es	
121-122	3 Ahi che partenza amara! ああ、なんと苦い別れだろう！	Es	
123-124	8 Oh dio che fier tormento! 神様、なんと激しい苦痛！	Es	
125-146	9 Ah mi si spezza il cor, ah mi si spezza il cor, ah mi si spezza il cor, ah mi si spezza il cor, ah mi si spezza il cor, mi si spezza il cor, mi si spezza il cor. ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける、ああ、私の心は張り裂ける。	Es→B→Es	

犬輔：87-89小節に1回だけ「残りなさい Resta」が出てきます。1回だけです。そしてその後ろに「ああ、神様！ Oh Dio!」が追加されています。モーツァルトが「残りなさい Resta」を「ああ、神様！ Oh Dio!」に置き換えたのはこれがヒントになったのかも知れませぬ。

鳥代：トゥファーンによれば、緩／急アリアは70年代半ばに流行し（パイジエッロは“2キャラクターのアリア”と呼んでいる）、後に2テンポのロンドに体系化されたといひます。

犬輔：調性が単純ですが、メリスマの華やかさはモーツァルトにはない特徴です。

教授：それについてトゥファーンはこう述べている。「パイジエッロが派手で要求の厳しい声のジェスチャーで表現した一方、モーツァルトはダリオの苦しみの表現をハーモニーと半音階に委ねた。ゴットフリート・フォン・ジャカンには才能のあるアマチュアではあったが、アンサーニのように洗練されたテクニックを備えた名手ではなかったのである」。

## 6. まとめ

鳥代：K.513の歌詞がパイジエッロの《ダリオの敗北》第二幕 第9場から採られていると分かりました。トラエッタの同作品にも同じ歌詞がありますが、パイジエッロの曲にK.513との類似が多く見られるためトラエッタからの引用ではないと考えられます。でもパイジエッロの楽譜を参考にしたのは確かだとしても、楽曲構成の一致には偶然も含まれていると考えられます。比較した結果（私案）を表にしましょう。

表5 パイジエッロのアリアとモーツァルトのアリア K.513の比較（私案）

比較	項目	パイジエッロ	モーツァルト
偶然の一致？	主調	変ホ長調	変ホ長調
	第6詩行	レチタティーヴォ	レチタティーヴォ風
	第7詩行	アレグロの開始部に	アレグロの開始部に
	歌詞の変更	「ああ、神様」をちりばめ使用	「ああ、神様」をちりばめ使用
手本にした？	構成	ラルゲット 2/4+アレグロ 4/4 （「2キャラクターのアリア」）	ラルゲット 2/4+アレグロ 2/2+ビュ・アレグロ 2/2
	第8詩行	「残りなさい」を1回だけ	「残りなさい」をカット
相違点	調性パレット	主調と属調	和声の変化が豊か
	歌詞の追加	なし	「さらば Addio」を追加
	歌唱テクニック	メリスマの華やかさ	テクニックを要しない

犬輔：パイジエッロ版の歌詞の作詩者候補を表にまとめておきましょう。

表6 K.513の作詩者候補

《ダリオの敗北》からの K.513 作詩者候補	根拠	判定
サンタンジョーリ＝モルビッリ	オペラ台本原作者	改訂部分の作者ではありえない
ローマの修道院長ジュゼッペ・カザーリ	改訂者の一人	当該歌詞の作者かは不明瞭
ミラーノの詩人ジョヴァンニ・デ・ガメツラ	当該歌詞第2節の原作者	当該歌詞全体の作者ではない
ローマの出版者アルカンジェロ・カサレッティ	当該歌詞含む台本出版者	出版者兼編集者である可能性あり

結果として「デ・ガメツラ作の歌詞を歌手のアンサーニがカサレッティに伝え、カサレッティはその第2節を流用し新しい全詩行を創作した」とぼくには思われます。

鳥代：音楽としてはパイジエッロを手本にして作曲したということもさることながら、ジャカンというアマチュア歌手の声とテクニックにぴったりと合わせて仕上げた曲だという点にもう一度立ち返って注目すべきだとわたしは思います。

教授：パイジエッロの《ダリオの敗北》はローマ初演（1776）の後、フィレンツェ（1776）、ボローニャ（1777）、ナポリ（1777）、ジェノヴァ（1782）そしてブラウンシュヴァイク（1784）で再演された<sup>注17</sup>。モーツァルトの曲との比較のためにも現代の蘇演が待たれるね。

注1：野口秀夫「モーツァルトのノットウルノ K.346 (439a) & K.439 の見出された台本作者たち」神戸モーツァルト研究会 第276回例会 ∞

注2：Eigenhändiges Werkverzeichnis. Faksimile. British Library, Stefan Zweig Ms 63. Einführung und Übertragung von Albi Rosenthal und Alan Tyson. Neue Ausgabe Sämtlicher Werke, X/33/1. Kassel, 1991.

注3：「ti lascio」でネット検索すると数えきれないほどの歌詞がヒットする。

注4：La disfatta di Dario. Dramma per musica da rappresentarsi nel Teatro di Torre Argentina nel carnevale dell'anno 1776. Dedicato a sua eccellenza donna Ottavia Odescalco Rospigliosi duchessa di Zagarolo etc. - Roma: Arcangelo Casaletti, [1776]. (Sartori 1990 07993) ∞

注5：La disfatta di Dario. Dramma per musica da rappresentarsi nel nobilissimo Teatro di S. Benedetto il carnevale dell'anno 1778. - In Venezia: presso Modesto Fenzo, 1778. (Sartori 1990 07997) ∞

注6：La disfatta di Dario. Dramma per musica del duca di S. Angelo Morbilli da rappresentarsi nel Real Teatro di S. Carlo a dì 20 gennaio 1756 in cui si festeggia la nascita del nostro augusto sovrano. Alla maestà della regina sua diletta consorte dedicato. - Napoli: Domenico Lanciani, 1756. (Sartori 1990 07986). corago での閲覧不可。

注7：Tufano, Lucio (2018). Mozart e Paisiello: a proposito dell'aria Mentre ti lascio, o figlia K. 513, in Mozart Studien, XXV, 2018, pp. 133-174 ∞.

注8：La disfatta di Dario. Dramma per musica da rappresentarsi nel Teatro della città d'Alessandria in occasione della solita fiera d'ottobre 1779 sotto la protezione di s.r.m. - Alessandria: Ignazio Vimercati, [1779]. (Sartori 1990 07998) ∞

注9：Medonte re di Epiro. Dramma per musica da rappresentarsi nel Regio-Ducal Teatro di Milano per il carnevale dell'anno 1775. Dedicato alle ll.aa.rr. il serenissimo arciduca Ferdinando principe reale d'Ungheria e Boemia, arciduca d'Austria, duca di Borgogna e di Lorena ec., cesareo reale luogo tenente, governatore e capitano generale nella Lombardia Austriaca, e la serenissima arciduchessa Maria Ricciarda Beatrice d'Este principessa di Modena. - In Milano: nella stamperia di Giovanni Montani, [1775]. (Sartori 1990 15349) ∞

注10：さらにリブレットには作曲家がローマ生まれのフェリーチェ・アレッシンドリ Felice Alessandri (1747-98)ではなく、シエナ生まれのルイーダ・アレッシンドリ Luigi Alessandri (1736-94)であると書かれている。

注11："La Disfatta di Dario. Dramma per musica da rappresentarsi nel teatro di Torre Argentina nel carnevale... 1776..." (1776) with Arcangelo Casaletti (1729-1799?) as Editor ∞

注12：表1のアリアはオペラで歌われるときにも歌詞からだけでは対面相手が分かりにくい。一方、手本と思われる表2は歌詞に対面相手への呼びかけがあるため分かりやすい。なお、トラエッタ版のト書きは「立ち去るようにと促がすリアルコに」とあり、ここでは特に演技が重要であることを示している。

注13：海老澤敏訳、モーツァルト大全集 第15巻、小学館、1993、p.311

注14：Berlin, SBB Mus. ms. autogr. W. A. Mozart 513

注15：NMA II/7/4: Arien, Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester · Band 4, Notenedition (Kunze, 1972) ∞

注16：前掲 NMA II/7/4, Notenedition (Kunze, 1972) ∞

注17：corago ∞

（作成：2023年12月3日）